

大人と子ども

文學士 倉橋惣三氏談

▲兩者の區別 近頃でこそ大人と子供が其性質上又體質上全然別種類に屬すべきものであると云ふ事が漸く理解つて來たが以前には兩者は全く同一のもので子供は單に大人の小さいものに過ぎない様に考へられて居た其の結果として大人と子供との間には取扱上何等の區別も無く子供を待遇するにも大人と同様只小さいからと云ふので多少取扱ひに手加減をする外子供を何處までも子供にして取扱ふ或は特別な方法や設備は更に考へられなかつたのである處が近頃に至つて種々の方面の研究から或る一定の裁然たる區別は無い迄も大人と子供との間には各共通ならぬ別種の特質のある事が明にされて來た、で此の兩者の區別を益々明に爲やうと云ふのが自分等の研究である其の區別は諸種の方面から種々の人が研究して居るが先づ大人と子供の相違點の主なものゝ次の三つである

▲體格(外形)の相違 オーベンハイエムと云ふ獨逸の醫者等も大人子供別種論者の一人だが身體の發育の比例の上から見ても大人は子供が其儘に發育したものと見られず兩者は全然別種に屬せしむべきものであると云ふ事を主張して居る生後一年の赤兒の頭と成熟した大人の頭とを比べると大人の赤兒の凡そ二倍ある又大人の身長は赤兒の三倍腕は四倍足は五倍である若し大人は子供が其儘發達したもので子供を引延したのが大人であるとすれば身體の各部は同じ比例を以て發達すべきであるが事實は之と全く反して居る小児の頭は割合に大きく殆んど全身の三分の一の大きがあるが大人のは全身の八分の一に過ぎない又頭の形も子供の時には概して扁平で眼から下の部分は大人に比して其の位置が甚だ下方にある頭は子供は割合に長い

▲發育割合の相違 大人と子供では身體の發育の割合が非常に違ふ、ドナルドソンの統計に依ると赤兒の生れた時の體重を三二〇〇瓦とすれば一歳の時には九九〇〇瓦 二歳の時には一二八〇〇

死に増加する、然しながら其増加の割合は年々減少して或る一定の年齢に達すると殆んど重量を増加せぬ、又身長に關する統計を見ても生後一年間は二五仙米の成長を見るが一歳から二歳になる時には一〇仙米に減じ更に十七歳から十八歳になる時分には二仙米位しか延びない、脳の重量の如きも七歳から八歳になる時分には六・三八パーセントの増加があるか十七歳位になると僅かに二パーセント位しか重量を増さぬ、所謂學齡時代は脳の重量が最も増加する時がある、以上述べた如く發育の割合の甚しく相違して居る所から見ても大人と子供とは全然別種類のもものと見た方が宜い。

▲内部機關の相違
 ファイロルト氏の說に依ると赤兒の體重と骨の重さの比重は一六・〇七パーセントであるが大人になると一五・三五パーセントに減する筋肉の重量は之れに反して赤兒の二九・〇四パーセントに對し大人は四九・パーセントを有し其割合は増加して居る、肺の重量は大人は子供の其の約二十倍心臟の重量は一・二五倍、脳の

重量は三七・倍眼の重量は一・七倍で、重量増加の割合は身體の各機官に從つて各異つて居る
 ▲大人と子供の精神
 以上述べた諸點の相違から大人と子供の相違は明らかである、心理學上兩者の相違は生理學上に於ける程明確には解らないが子供から大人に至る精神の發達は身體の發達と同じく單に其儘の發達ではない、子供と大人は精神發達の比例を異にして居る子供の感情意思の發達は大人の其の發達とは全然違つて居る、決して子供の時に現はれた精神作用が大人になる迄連續するものでは無く精神作用の現はれるには自ら一定の時期があるのである、乳を吸ふ力、匍ふ力、歩く力、物を云ふ力は時期を追うて發達するもので人間の本能性は一時に現はれて來るものではない
 ▲青春期の前後
 所謂青春期の以前と以後に於ては人の心理作用は著しく異なるものである、青春期以前の子供の心理作用は主として外界の刺激を受け容れる働きをするが青春期以後に於ては寧ろ自發的となる傾きがある、即ち青春期前には認識力觀察力模倣力が著しく發達するに反し、青春期

後には専ら回想力構想力が發達するのである、又青春前期には人は概して個人的傾向を有つて居るが青春期後には甚だ社交性の發達を見るに至るもので所謂青春期を界限として人は大人と子供に區別される

▲本質の相違 以上述べた所によつて大人と子供の相違は單に程度の相違では無く本質の相違なる事が解る從つて大人に對する態度と子供に對する態度とでは程度を變へるばかりで無く其本質をも全然變じなければならぬ、又子供と大人は興味、記憶力作業力疲勞の状態を異にする故子供に對する勞働問題の如きも單に大人に課する勞働時間を短縮したと云ふ様な手加減に止まらず、教育上又法律上子供は飽く迄も子供として單獨に取扱つて貰ひ度い

▲子供物と大人物 子供と大人とは趣味も娛樂も全然異なるものであるから子供の見るべき諸種の興業物や玩具の如きは子供向きとして研究せらるべきであるのに多くは大人の趣味に合ふ様に作られてある、正月子供が弄ぶ羽子板の如きも何も大

人の趣味其も一種の狹斜趣味に相應して作られたもの計りだが子供用としては決して正當なものではない俳優の似顔の押繪等に對して普通の兒女は何等の趣味をも有つものではない、又「家族合せ」の如きも其趣好は甚だ面白いが醫者藪井竹庵とか會社員高樫木戸郎とか云ふ様な名は決して單純な子供の趣味に合ふもので無く、寧ろ大人の複雑した滑稽趣味洒落趣味に適ふものである其の他「百人一首」は勿論「いろは歌留多」の如きも決して子供向きの玩具として成功したものとは云へない、自分分は子供とは最も關係の深い玩具の如きものから先づ改良を施して全然大人の趣味を離れた子供向きの玩具の研究を望むのである

寒中の下着

寒中の下着として直接肌に着けるものでフランネルと木綿と執ちらが好からうかと問ふたならば十人まで五分は子供とは最も關係の深い玩具の如きものから先づ改良を施して全然大人の趣味を離れた子供向きの玩具の研究を望むのである